（郵便物認可）

時事新報

時事新報定價
一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓
一箇年前金六圓
○時事新報社ヨリ直接ニ郵便ニテ送送スルモノニ限リ本文定價ノ外ニ一箇月二十六錢ノ郵送料ヲ申受ク

時事新報廣告料前金一行ニ付

	一行廿四字詰	一日限	二日以上	七日以上	十六日以上
自一行至十行	三十錢	六十錢	五十錢	四十錢	三十錢
自十一行至廿行	二十錢	四十錢	三十錢	二十五錢	二十錢
廿一行以上	一十錢	二十錢	一十五錢	一十錢	一十錢

第千七百十九號　木曜日　明治二十年十月二十日（戊午）
舊丁亥九月四日
日出午前六時十一分　日入午後五時十八分
月出午前八時三十五分　月入午後九時十五分
編纂年月日　午前七時三十四分　午後七時五十六分
（西暦一千八百八十七年）

時事新報

廢府縣の說行はれ難きに非ず

府と云ひ縣と云ひ將た又郡區町村等の別を設けて今日大小の施政其宜きを得る所以は古來の習慣人民ときに因襲して替其便に安するものに外ならずと雖も抑も其習慣の源を溯りて始めに斯る大小の區畫を設けたるろの標準を何物ありやと尋ぬるに全くは距離の長短往復の便不便を本として之を定めさるあと疑ふ可ふ或は土地狹隘あるも人口特に稠密あるが爲め一時行政の都合を以て之を別區域と看做しさるの例もあらんなれ共是れは僅か一小部面の話しにして其大體より論すれば府縣郡區以下大小政治上の區畫は皆運輸交通の便否如何んを察して之を制定したるは事實に於て明白なる所あり往日我國にて汽車船れ設けあきは勿論、馬車人力車の便利さへも開けざりし以前に在りては駕籠に乘り馬に跨り終日陸行して行程僅々七里を踰ゆる能はず江戸長崎の間四百里にして四十日の道中も交通不便の當日にありては人情あれに安んじて怪まざりしかども汽船開通の今日と成りては船中に逸坐して僅々五日と費すのみ之と二三十年の昔に比較すれば今の東京長崎の距離は恰も八分の一に減じて四百里の行程忽ち三百五十里を縮めたるに異ならず實に驚くべきの變化あれ共交通の便徇は之に止まる可らず現今起工中なる東海山陽九州三道の鐵道線路聯絡を通ずるも數年の後ゐ在りとせれば其曉ゐい東京より二晝夜内外にして長崎に達するとも容易なるべし汽車の二日は汽船の五日に比して又々三日を短縮にしたる者あり此の如く他の方向にも同じく鐵道の便利開けて國中殆んど軌條の蛛網線を見ざるなきの時に至らば日本如犯精爾たる小國は八十餘州津々浦々何れの所として往來自在ならざるいなく行客寧ろ其行程は足ふすして興なきを訴るの奇談もある可し文明の世界に在りて距離の長短は里數を以て計らずして之を通過する時間を標準にするの例なきば例へば東京より長崎までの間を二日に通過すれば之を四百里と云はずして二日と稱し大坂は一日に足らずまて名古屋は何時、埼玉千葉神奈川等の如き近縣地方は域は時と以て計るに足ふすして何分時間と名け今日日本橋區の人が歩して淺草區に行くよりも近きとあらん我國の前途遠きも十數年を出ずまて斯る運命ゐ際會すると今日より期して待つべきもれあれば之と同時ゐ社會凡百れ事物は必ず其面目を一新して隨て彼の行政區畫府縣治の別れ知きも大に其態と類更せざれば不都合なるの事實を見出すとならん今日まそ前々よりの仕來りにて地方行政の區畫にも左さで不便利あきが如くなれ共文明大勢の進歩する其速力は非常あるものにして遠からず府縣分畫の實際に益ふさざるを見出すと必然なるべ故ゐ我輩は經世遠大の策を案ずて爰に廢府縣の說を開陳せんとするなり

今の地方行政區畫は一廳三府四十一縣より成るものあれ共北海道は未だ無人の荒地ゐして數年以前開拓使廢止の後ち一時縣治の制を設けたるも實際の不便を發見して遂に全道と其廳の管理に任せて廳政の所向内地と同日に論ず可らざるもれあらんあれば姑く擱き殘る三府四十一縣の區畫に至りては必ず之を改と存せざるも敢て差支あきを信ずるなり王政維新の前後まそは三百の諸侯全國に割據して藩々其政を異にしたるの趣は封建郡縣の相違ころあれ恰も日本國中を三百餘の府縣治に分割したる者にして藩籍奉還の後に至り更に八十の府縣を置したるは以前の數ゐ比して著き減少なれども大政統一中央集權の治行はれたるの當日あきは三百の藩政が八十の廳治に歸して少しも不都合なきのまあらず後ち倍々之を減ぜて遂に今日に至りて四十の府縣治ゐ縮まりさるは非常の變遷なれども去迎之が爲め茲に地方の行政に滯を生ずたるの例證もあく人民も亦その不便を感ずたりとの談を聞ゐず唯其地方分畫のいよ〳〵減ずるゐ從て諸般の政務のいよ〳〵統一を致したる効迹は蔵ふ可らざるのみ八十の府縣を半減ゐしさる同じ其筆法を以て今の四十府縣を更ゐ又全廳に附せんとするは唐突の說に似たれ共漫然今の府縣治の數を減ず可らずと爲すの論こそ無稽なれと申すは既に前にも述べたる如く元來地方行政の區畫を定むべき其標準は距離の長短往復れ便不便ゐ在ると爭ふ可らずとせば鐵道電信郵便汽船運輸交通の便利此上なき今の時勢、後の運命、國政一統の下に復さ又地方の小區畫を必要なりとする理由なれば旣に現今にても東京近傍及び鐵道通達の數縣を併せ之を中央に統轄して何等の不都合あるべきや獨り其不都合と見出す能はざるのみならず之と廢するころ却て煩を去り費を省くの法ゐ之て官民の便利是より直接に大なるものなる可き日本全國交通の次第に便なるに從ひ府縣分轄の要用あきに至るの時期遠きに非ずとすれば廢府縣の一說今日より之を斷行するの用意あるも大早計には侮らざる可し右の如く地方分轄の制度を廢止そること要用なりと云ふも我輩は唯府縣治の區畫に限るのみにして以下郡區の組織に至りては素より之を動もの憂あきのまか彌よ〳〵府縣治を廢もるの時節に際せば其廳の事務分れて中央政府に歸するものと郡區役所に渡るべきものと自か ら區別ある可ければ其責任共權限にも亦變更する所なかる可らず其邊の考案は之れを他日に讓るとして取敢へず我輩は廢府縣の得失を讀者諸君に質さんと欲せるものなり

官報

○勅令

陸軍戸山學校條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治廿年十月十八日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
陸軍大臣伯爵大山巌

勅令第五十四號

陸軍戸山學校條例

第一條　陸軍戸山學校ハ隊附將校下士子分遣シ學生ト爲シ歩兵戰術、射撃、體操幷ニ劍術ノ原理ヲ研究セシメ且其演習ニ關スル教則ヲ一定ナラシメ常ニ内外戰術進歩ノ形況ヲ知悉シ歩兵ノ教育一般ノ改良ヲ圖ルヲ目的トスル所トス○第二條　本校ニ戰術科學生射撃科學生體操科學生及教導大隊ヲ置ク○第三條　本校ニ左ノ職員ヲ置ク「校長　歩兵大佐」「次長　歩兵中少佐」「副官　歩兵大尉及中尉」「教官　歩兵少佐及大中少尉」「軍吏」「軍醫○第四條　校長ハ監軍ニ隷シ校務ヲ總理シ學術進歩ノ責ニ任ス○第五條　校長ハ懲罰權幷ニ校附官僚、學生ノ休暇付與權ヲ有スルコト聯隊長ニ同シ○第六條　次長ハ校長ヲ輔佐シ專ラ教育ノ事ニ任シ兼テ校中ノ庶務及經理事務ヲ監視ス○第七條　副官ハ校中ノ庶務ヲ掌リ其下ニ下士及陸軍屬ヲ置ク○第八條　教官ハ各科ノ教授ヲ分擔シ教導大隊ノコトヲ兼攝ス○第九條　各科教官中高級ノ者一名ヲ其科長ト爲ス○第十條　教導大隊ノ大隊長ハ戰術科長ト爲ス○第十一條　教官ノ下ニ教官補置ク○第十二條　軍吏ノ下ニ書記及筆若干員軍醫ノ下ニ看護長及卒若干員ヲ置ク○第十三條　戰術科ハ歩兵戰術活用上ノ教育ヲ完全ナラシムルヲ目的トシ歩兵各聯隊ノ中尉ヲ以テ其學生ト爲ス但時宜ニ依リ歩兵少佐若クハ大尉及工兵士官ヲ以テ其學生ト爲スコトアルヘシ○第十四條　射撃科ハ射撃教官ヲ育成スルヲ目的トシ歩兵中少尉及下士ヲ以テ其學術ニ適當ト認ムル者ヲ選抜シテ其學生ト爲ス○第十五條　體操科ハ體操及劍術教官ヲ育成スルヲ目的トシ歩騎砲工輜重兵科ノ少尉及下士ニシテ體格學術共ニ之ニ適當ト認ムル者ヲ選抜シテ其學生ト爲ス○第十六條　教導大隊ハ學生訓練ノ用ニ供スルモノトス其下士兵卒ハ歩兵各聯隊ヨリ之ヲ分遣セシム○第十七條　戰術科學生射撃科學生及體操科學生ノ學期ハ一年ヲ二期ニ分チ其第一期ハ概ヲ九月ニ始リ一月ニ終リ其第二期ハ概ヲ二月ニ始リ六月ニ終ルモノトス」劍術學生ノ學期ハ概ヲ九月ニ始リ六月ニ終ルモノトス○第十八條　各科學生ノ人員ハ其時々監軍之ヲ定メ陸軍大臣之ヲ告達ス○第十九條　學生分遣ノ告達アレハ近衛都督鎮臺司令官ハ部下ノ聯隊長（獨立大隊ナレハ大隊長獨立中隊ナレハ中隊長）ヲシテ士官下士中身體强壯行狀方正勤務勉勵ノ者ニシテ第十三條乃至第十五條ノ目的ニ適スヘキ者ヲ選定セシメ而テ入校期十日前迄ニ其名簿ニ考科表ヲ添ヘ戸山學校長ニ送達スヘシ○第二十條　學生士官ハ校外ニ其下士ハ校内ニ居住セシム」學生所要ノ兵器書籍消耗品ハ貸與スルモノアリ又支給スルモノアリ」其下士ニ在テハ雜具ヲ貸與シ食料ハ原隊ヨリ之ヲ支給セシム」學生ノ旅費ハ士官下士ヲ論セス總テ本校ニ於テ之ヲ支給ス○第二十一條　學生中ノ顯屆其他業務ニ關スル件ハ總テ校長ノ管理ニ屬ス○第二十二條　學生ノ俸給ハ原隊ヨリ前月中ニ本校ニ交付シ同校ニ於テ之ガ受授ヲ爲スモノトス○第二十三條　學生ハ情願ヲ以テ歸省又ハ退校スルヲ許サズ疾病其他ノ事故ヲ以テ卒業ノ目的ナキ者ヲ退校歸隊セシムルハ例外トス○第二十四條　學生士官ノ乘馬演習ハ調馬隊ニ於テ之ヲ行ハシム○第二十五條　各學期ノ終リニ於テハ學生ニ大試驗ヲ施シ以テ其列序ヲ定メ卒業證書ヲ付與シテ歸隊セシム但優等者ニハ別ニ賞狀若クハ賞品ヲ與フルコトアルベシ○第二十六條　學生下士ノ中學術優等ノ者ヲ選抜シテ員外助教ヲ命シ學生下士ノ教授ヲ補助セシメ之ニ若干ノ増俸ヲ給シ校内ニ居住セシム」員外助教ノ命ヲ受クル者ハ每學期ノ終リニ於テ其半數ノミ歸隊セシム○第二十七條　教導大隊ノ下士及兵卒ハ六月若クハ七月ニ於テ其一半ヲ歸隊セシメ十一月ニ於テ之ヲ補充ス○第二十八條　教導大隊ノ下士ハ常備服役尚ホ二箇年以上ノ期アル一二等軍曹ニシテ勤務勉勵且體强壯行狀方正學術優等ノ者ヲ選抜分遣セシム而シテ教導大隊ニ於テ應分ノ教育ヲ受ケ原隊ニ復歸ノ後其教育ヲ隊中ニ及ホスベキ見込アルモノタルベシ○第二十九條　教導大隊ノ兵卒ハ常備服役尚ホ一年九箇月ノ期アル勤勉勵行狀身體方正强壯ノ者ヲ選抜シテ分遣シ學生ト爲シ歩兵戰術、射撃、體操幷ニ劍術ノ原理ヲ研究セシメ且其演習ニ關スル教則ヲ一定ナラシメ常ニ内外戰術進歩ノ形況ヲ知悉シ歩兵ノ教育一般ノ改良ヲ圖ルヲ目的トスル所トス○第二條　本校ニ戰術科學生射撃科學生體操科學生及教導大隊ヲ置ク○第三條　本校ニ左ノ職員ヲ置ク「校長　歩兵大佐」「次長　歩兵中少佐」「副官　歩兵大尉及中尉」「教官　歩兵少佐及大中少尉」「軍吏」「軍醫○第四條　校長ハ監軍ニ隷シ校務ヲ總理シ學術進歩ノ責ニ任ス○第五條　校長ハ懲罰權幷ニ校附官僚、學生ノ休暇付與權ヲ有スルコト聯隊長ニ同シ○第六條　次長ハ校長ヲ輔佐シ專ラ教育ノ事ニ任シ兼テ校中ノ庶務及經理事務ヲ監視ス○第七條　副官ハ校中ノ庶務ヲ掌リ其下ニ下士及陸軍屬ヲ置ク○第八條　教官ハ各科ノ教授ヲ分擔シ教導大隊ノコトヲ兼攝ス○第九條　各科教官中高級ノ者一名ヲ其科長ト爲ス○第十條　教導大隊ノ大隊長ハ戰術科長ト爲ス○第十一條　教官ノ下ニ教官補置ク○第十二條　軍吏ノ下ニ書記及筆若干員軍醫ノ下ニ看護長及卒若干員ヲ置ク○第十三條　戰術科ハ歩兵戰術活用上ノ教育ヲ完全ナラシムルヲ目的トシ歩兵各聯隊ノ中尉ヲ以テ其學生ト爲ス但時宜ニ依リ歩兵少佐若クハ大尉及工兵士官ヲ以テ其學生ト爲スコトアルヘシ○第十四條　射撃科ハ射撃教官ヲ育成スルヲ目的トシ歩兵中少尉及下士ヲ以テ其學術ニ適當ト認ムル者ヲ選抜シテ其學生ト爲ス○第十五條　體操科ハ體操及劍術教官ヲ育成スルヲ目的トシ歩騎砲工輜重兵科ノ少尉及下士ニシテ體格學術共ニ之ニ適當ト認ムル者ヲ選抜シテ其學生ト爲ス○第十六條　教導大隊ハ學生訓練ノ用ニ供スルモノトス其下士兵卒ハ歩兵各聯隊ヨリ之ヲ分遣セシム○第十七條　戰術科學生射撃科學生及體操科學生ノ學期ハ一年ヲ二期ニ分チ其第一期ハ概ヲ九月ニ始リ一月ニ終リ其第二期ハ概ヲ二月ニ始リ六月ニ終ルモノトス」劍術學生ノ學期ハ概ヲ九月ニ始リ六月ニ終ルモノトス○第十八條　各科學生ノ人員ハ其時々監軍之ヲ定メ陸軍大臣之ヲ告達ス○第十九條　學生分遣ノ告達アレハ近衛都督鎮臺司令官ハ部下ノ聯隊長（獨立大隊ナレハ大隊長獨立中隊ナレハ中隊長）ヲシテ士官下士中身體强壯行狀方正勤務勉勵ノ者ニシテ第十三條乃至第十五條ノ目的ニ適スヘキ者ヲ選定セシメ而テ入校期十日前迄ニ其名簿ニ考科表ヲ添ヘ戸山學校長ニ送達スヘシ○第二十條　學生士官ハ校外ニ其下士ハ校内ニ居住セシム」學生所要ノ兵器書籍消耗品ハ貸與スルモノアリ又支給スルモノアリ」其下士ニ在テハ雜具ヲ貸與シ食料ハ原隊ヨリ之ヲ支給セシム」學生ノ旅費ハ士官下士ヲ論セス總テ本校ニ於テ之ヲ支給ス○第二十一條　學生中ノ顯屆其他業務ニ關スル件ハ總テ校長ノ管理ニ屬ス○第二十二條　學生ノ俸給ハ原隊ヨリ前月中ニ本校ニ交付シ同校ニ於テ之ガ受授ヲ爲スモノトス○第二十三條　學生ハ情願ヲ以テ歸省又ハ退校スルヲ許サズ疾病其他ノ事故ヲ以テ卒業ノ目的ナキ者ヲ退校歸隊セシムルハ例外トス○第二十四條　學生士官ノ乘馬演習ハ調馬隊ニ於テ之ヲ行ハシム○第二十五條　各學期ノ終リニ於テハ學生ニ大試驗ヲ施シ以テ其列序ヲ定メ卒業證書ヲ付與シテ歸隊セシム但優等者ニハ別ニ賞狀若クハ賞品ヲ與フルコトアルベシ○第二十六條　學生下士ノ中學術優等ノ者ヲ選抜シテ員外助教ヲ命シ學生下士ノ教授ヲ補助セシメ之ニ若干ノ増俸ヲ給シ校内ニ居住セシム」員外助教ノ命ヲ受クル者ハ每學期ノ終リニ於テ其半數ノミ歸隊セシム○第二十七條　教導大隊ノ下士及兵卒ハ六月若クハ七月ニ於テ其一半ヲ歸隊セシメ十一月ニ於テ之ヲ補充ス○第二十八條　教導大隊ノ下士ハ常備服役尚ホ二箇年以上ノ期アル一二等軍曹ニシテ勤務勉勵且體强壯行狀方正學術優等ノ者ヲ選抜分遣セシム而シテ教導大隊ニ於テ應分ノ教育ヲ受ケ原隊ニ復歸ノ後其教育ヲ隊中ニ及ホスベキ見込アルモノタルベシ○第二十九條　教導大隊ノ兵卒ハ常備服役尚ホ一年九箇月ノ期アル勤勉勵行狀身體方正强壯ノ者ヲ選抜シテ分遣シ學生ト爲シ歩兵戰術、射撃、體操幷ニ劍術ノ原理ヲ研究セシメ且其演習ニ關スル教則ヲ一定ナラシメ常ニ内外戰術進歩ノ形況ヲ知悉シ歩兵ノ教育一般ノ改良ヲ圖ルヲ目的トスル所トス○第二條　本校ニ戰術科學生射撃科學生體操科學生及教導大隊ヲ置ク○第三條　本校ニ左ノ職員ヲ置ク「校長　歩兵大佐」「次長　歩兵中少佐」「副官　歩兵大尉及中尉」「教官　歩兵少佐及大中少尉」「軍吏」「軍醫○第四條　校長ハ監軍ニ隷シ校務ヲ總理シ學術進歩ノ責ニ任ス○第五條　校長ハ懲罰權幷ニ校附官僚、學生ノ休暇付與權ヲ有スルコト聯隊長ニ同シ○第六條　次長ハ校長ヲ輔佐シ專ラ教育ノ事ニ任シ兼テ校中ノ庶務及經理事務ヲ監視ス○第七條　副官ハ校中ノ庶務ヲ掌リ其下ニ下士及陸軍屬ヲ置ク○第八條　教官ハ各科ノ教授ヲ分擔シ教導大隊ノコトヲ兼攝ス○第九條　各科教官中高級ノ者一名ヲ其科長ト爲ス○第十條　教導大隊ノ大隊長ハ戰術科長ト爲ス○第十一條　教官ノ下ニ教官補置ク○第十二條　軍吏ノ下ニ書記及筆若干員軍醫ノ下ニ看護長及卒若干員ヲ置ク○第十三條　戰術科ハ歩兵戰術活用上ノ教育ヲ完全ナラシムルヲ目的トシ歩兵各聯隊ノ中尉ヲ以テ其學生ト爲ス但時宜ニ依リ歩兵少佐若クハ大尉及工兵士官ヲ以テ其學生ト爲スコトアルヘシ○第十四條　射撃科ハ射撃教官ヲ育成スルヲ目的トシ歩兵中少尉及下士ヲ以テ其學術ニ適當ト認ムル者ヲ選抜シテ其學生ト爲ス○第十五條　體操科ハ體操及劍術教官ヲ育成スルヲ目的トシ歩騎砲工輜重兵科ノ少尉及下士ニシテ體格學術共ニ之ニ適當ト認ムル者ヲ選抜シテ其學生ト爲ス○第十六條　教導大隊ハ學生訓練ノ用ニ供スルモノトス其下士兵卒ハ歩兵各聯隊ヨリ之ヲ分遣セシム○第十七條　戰術科學生射撃科學生及體操科學生ノ學期ハ一年ヲ二期ニ分チ其第一期ハ概ヲ九月ニ始リ一月ニ終リ其第二期ハ概ヲ二月ニ始リ六月ニ終ルモノトス」劍術學生ノ學期ハ概ヲ九月ニ始リ六月ニ終ルモノトス○第十八條　各科學生ノ人員ハ其時々監軍之ヲ定メ陸軍大臣之ヲ告達ス○第十九條　學生分遣ノ告達アレハ近衛都督鎮臺司令官ハ部下ノ聯隊長（獨立大隊ナレハ大隊長獨立中隊ナレハ中隊長）ヲシテ士官下士中身體强壯行狀方正勤務勉勵ノ者ニシテ第十三條乃至第十五條ノ目的ニ適スヘキ者ヲ選定セシメ而テ入校期十日前迄ニ其名簿ニ考科表ヲ添ヘ戸山學校長ニ送達スヘシ○第二十條　學生士官ハ校外ニ其下士ハ校内ニ居住セシム」學生所要ノ兵器書籍消耗品ハ貸與スルモノアリ又支給スルモノアリ」其下士ニ在テハ雜具ヲ貸與シ食料ハ原隊ヨリ之ヲ支給セシム」學生ノ旅費ハ士官下士ヲ論セス總テ本校ニ於テ之ヲ支給ス○第二十一條　學生中ノ顯屆其他業務ニ關スル件ハ總テ校長ノ管理ニ屬ス○第二十二條　學生ノ俸給ハ原隊ヨリ前月中ニ本校ニ交付シ同校ニ於テ之ガ受授ヲ爲スモノトス○第二十三條　學生ハ情願ヲ以テ歸省又ハ退校スルヲ許サズ疾病其他ノ事故ヲ以テ卒業ノ目的ナキ者ヲ退校歸隊セシムルハ例外トス○第二十四條　學生士官ノ乘馬演習ハ調馬隊ニ於テ之ヲ行ハシム○第二十五條　各學期ノ終リニ於テハ學生ニ大試驗ヲ施シ以テ其列序ヲ定メ卒業證書ヲ付與シテ歸隊セシム但優等者ニハ別ニ賞狀若クハ賞品ヲ與フルコトアルベシ○第二十六條　學生下士ノ中學術優等ノ者ヲ選抜シテ員外助教ヲ命シ學生下士ノ教授ヲ補助セシメ之ニ若干ノ増俸ヲ給シ校内ニ居住セシム」員外助教ノ命ヲ受クル者ハ每學期ノ終リニ於テ其半數ノミ歸隊セシム○第二十七條　教導大隊ノ下士及兵卒ハ六月若クハ七月ニ於テ其一半ヲ歸隊セシメ十一月ニ於テ之ヲ補充ス○第二十八條　教導大隊ノ下士ハ常備服役尚ホ二箇年以上ノ期アル一二等軍曹ニシテ勤務勉勵且體强壯行狀方正學術優等ノ者ヲ選抜分遣セシム而シテ教導大隊ニ於テ應分ノ教育ヲ受ケ原隊ニ復歸ノ後其教育ヲ隊中ニ及ホスベキ見込アル

○勅令

陸軍戸山學校條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

雜報

○英國人民の所得減少す

據れば千八百七十九年より八百八十年に至て所得税の母金い二億四千萬磅なりしに今日は千八百八十四年より五年に至る間の平均二萬五千磅に達し此五箇年の間に於て所得税の母金の五分れとる所得税の母金の增加なりし尤も此五箇年の間に於て七分の增加なりし尤も此五箇年の間に於て八十四年より五年に至る間の平均百二十萬磅に達し

○公賣處分の伺

去る六月中本社より地所船舶賣讓與に關する伺書等の契約ありて登記濟なりしに對し公賣處分をなすと記載したれ共其右は明治十年第七十六號達に基き太政官第十六號達に基き若し其通知を怠り處分をなすと雖も金辨納の義申出づると雖も公賣處分をなすと心得べきやの旨を申出でたるに右は去る七日伺出のは公賣の際公告に明記するのは公賣の際公告に明記する旨九月五日付法と受取りたる旨九月代理公使原敬より通知あり

○海軍省告示第四號

就傍艦昨年十二月三日横須賀ヨリ出京シタル者ハ宿屋營業ト見做シ之カ處分ヲ爲ス

明治二十年十月十八日

海軍大臣伯爵西鄕從道

○警察令第十八號

止宿人屆規則左ノ通之ヲ定ム

明治二十年十月十九日

止宿人屆規則

第一條　本則ハ宿屋營業外ヨリ出京シタル者ハ宿屋營業ト見做シ之カ處分ヲ爲ス

第二條　宿泊人アリタルトキ投宿ノ時ヨリ二十四時内ニ屆出ヘシ若シ戸主不在ノ時ハ其一家ヲ管理スル者ヲ人歸鄕又ハ他ニ移轉シ若クハ時ハ乙號書式ニ從ヒ屆出ヘシ○第四條　止宿者ハ二十錢以上一圓二十錢以上ノ者ハ二十錢以上一圓二十錢以上ノ者ハ二十錢以上一圓二十錢以上ノ